

「第18回神戸景観・ポイント賞」 受賞作品が決まりました ～今年度は「まちなみ賞」など7件を表彰～

今年も神戸のまちに“個性がきらりと光るポイント”が生まれました

神戸市では、周辺の景観に調和しながらも個性が光るポイントや、地域にふさわしい優れた景観形成に貢献したと認められる建築物やまちなみなど、まちの中できらりと光るポイントを「神戸景観・ポイント賞」として、表彰しています。

今年度は、市民の皆さまから推薦された65件の候補作品のなかから、選考委員会の選考を経て、7件の受賞作品が決まりました。受賞した7作品をご紹介します。



神戸大学総合研究棟（社会科学系）・
放送大学兵庫学習センター

神戸ウイングスタジアム



■神戸大学総合研究棟（社会科学系）・放送大学兵庫学習センター （灘区六甲台町）

坂の地形を生かした御影石積の石垣など、隣接している歴史ある正門や校舎に対する配慮がなされているとともに、地域住民も利用できる地域開放型の空間づくりによって、魅力ある眺望点が生まれました。

■神戸ウイングスタジアム（兵庫区御崎町）

翼を広げたような特徴的な屋根は新たな“地域のランドマーク”となることが期待され、周辺市街地に対して威圧感を与えないよう配慮されたフォルムとなっています。また、設計施工から管理運営までを「公設民活方式」で実施することで、民間のアイデアやノウハウが十分に活かされています。

受賞作品のパネル展 開催中です

今年度の受賞作品のパネル展示を、「こうべまちづくりセンター」にて開催しています（12月27日まで）。

これまでに受賞した全18回152作品がご覧いただけます。

◆お問い合わせは、地域支援室景観係
(TEL078-322-5484)へ。

特別賞「まちなみ賞」を5団体が受賞しました

今年度からは「特別賞」として、地域が一体となってまちづくり活動を行うことにより形成された“地域らしさ”を持った美しいまちなみを表彰する「まちなみ賞」を新設しました。記念すべき第1回の受賞は、日頃からまちづくり活動に励んでおられる以下の5団体が選ばれました。

■「灘目の水車」(山田区民会)



かつて灘の酒造業を支えた住吉川水系にあるこの地域の歴史を伝えるため、地域住民によるワークショップを経て復元された「水車」を地域で日常管理し、また地域行事などに活用することで、“水を大切にする地域文化”の継承に取り組んでいます。

■「六甲せせらぎ通り」

(六甲道駅北地区まちづくり連合協議会)



写真(左)

■「松本せせらぎ通り」

(松本地区まちづくり協議会)



震災を体験した両地域から、それぞれの提案に基づく「せせらぎ」の整備に伴い、地区計画によって沿道建物の誘導を図るなど、せせらぎと一体となったゆとりと潤いのあるまちなみが生まれました。また、せせらぎを地域の手で維持管理する活動を通して、地域の美化とともにコミュニティの活性化が図られています。

■「三宮中央通りのまちなみ」

(三宮中央通りまちづくり協議会)

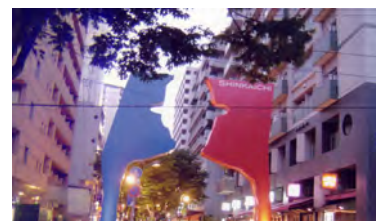
地下鉄海岸線の建設に伴う道路整備にあわせて、地域で通りのあり方を検討し、アーケードの撤去や日除けテントのルールづくりを行いました。また沿道の飾花や屋外広告物の景観誘導などについて、事業者への働きかけを積極的に行い、都心らしい開放感と調和のあるまちなみの形成を図っています。



■「新開地のまちづくりの取り組み」

(新開地周辺地区まちづくり協議会)

シンボルゲート「BIGMAN」の設置や空地を暫定活用した「キネマ横丁」の取り組みなどにより、新開地地区における景観の拠点を創りだし、にぎわいあるまちづくりに向けて積極的に取り組んでいます。



「神戸景観・ポイント賞」は、昭和53年に制定された「神戸市都市景観条例」にもとづき、神戸らしい景観形成に寄与している建築行為等を表彰することにより、景観に対する理解と意識の向上を図ることを目的として昭和61年に設けられた表彰制度です。今年度で18回目を迎え、これまでに、「神戸景観・ポイント賞」105件、「特別賞」47件、計152件を表彰しています。

～ これからのまちづくり ～

こうべまちづくりセンター

こうべまちづくりセンターは平成5年11月の発足から今年で10周年を迎えました。この間センターで行なってきた事業を振り返るとともに、センターの今後につながる活動について紹介したいと思います。

■まちづくりを学ぶ学生たちとの交流

こうべまちづくりセンターでは発足時よりまちづくりを学ぶ学生達との交流が行なわれてきています。平成7年の震災の年には「こうべまちづくり学生倶楽部」がまちづくりセンター内に発足しました。これは京阪神の都市計画学、建築学、住居学、社会学などを学ぶ学生の活動拠点として設けられました。当時はニューズレターの発行などの活動を行ってきました。

そして時を経て今年の7月には関西の約20大学のまちづくり系の学生が集まり、「スチューデント・パートナーシップ・ネットワーク（SPN）」が発足しました。まちづくりセンターもSPNの取り組みに対して交流会・勉強会の開催場所を提供するとともに、一緒にまちづくりに対しての勉強を行っています。またSPNは、自主的なまちづくり研究会の支援を目的に今年発足した「こうべまちづくりセンター・研究ネットワーク」の1つであり、今後は他の研究会との交流の橋渡しをまちづくりセンターで行なっていく、学生たちのまちづくり活動の輪がひろがることを期待しています。



(あーばんとーく 第4・72号)

■まちづくりの働きかけ

平成13年度より住民主体のまちづくり活動を進めるため、地域への呼びかけ・はたらきかけを行っています。地域の課題があり、まちづくりが必要と思われる地区に対して、他地区の事例紹介や、まち歩き、アンケートなどを行いまちづくりへの参加や組織作りを進めています。専門家の派遣やワークショップ隊の派遣など、まちづくりセンターで行っている様々な事業を通じて、地域の人たちにまちづくりの働きかけを行っています。



働きかけ地区の中には、地域の人たちの努力により

まちづくり協議会が結成され、勉強会、まち歩きなどを行ないながら、まちづくり活動を行っている地区もあり、今後も地域の人たちと協働でまちづくりを行なっていきたいと考えています。

(あーばんとーく 第67号)

■まちづくりの教室

まちづくりセンターは、住民主体のまちづくりを支援する一環として各種の「まちづくりの教室」を開いてきました。

震災前は一般住民を対象に教室を開いていましたが、震災で休止しました。

震災後は、「住民主体の復興のまちづくり」を支援する人材を充実のために若手コンサルタントを対象にした「まちづくり実践ゼミ」をはじめ、住民の相談などに答えられるように市職員向けの「まちづくり専門研修」、将来のまちづくりに携わる人材育成の「学生ゼミ」（実践ゼミに統合）や小学生を対象とした「親子まち探検」等を開催してきました。

平成9年度からは「こうべ市民安全まちづくり大学」の運営にも参画してきました。

こういった一連の「教室」が充実されてくるなか、より広い視



野に立ってまちづくりの魅力を伝えようと平成14年度から神戸市の「まちづくり関連の教室」を統合させた「こうべまちづくり学校」が開校されました。

まちづくりセンターは、この学校の事務局として運営の中核を担っています。学んだ知識を活かして地域の活動に取り組んでいる卒業生も増えてきており、「まちづくりの魅力」が、より多くの人達に広まることを願って今後も「まちづくりの教室」を充実させていきたいと考えています。

(あーばんとーく 第56号)

こうべまちづくりセンター発足10周年によせて

ソーシャル・キャピタルとは

〇はじめに

本年度、「神戸市復興計画」（平成7年6月策定）が終了する16年度に向けて、「神戸市復興・活性化推進懇話会」（平成10年6月設置）が主体となり、「復興の総括・検証」を実施している。その中間報告（平成15年10月公表）において、「これからの神戸づくり」を進める際の基本姿勢を示す考え方として「ソーシャル・キャピタル」という新しい概念が使われている。

ソーシャル・キャピタルという概念は、アメリカの政治学者であるロバート・パットナムの一連の研究が契機となって、近年、物的資本や人的資本などと並ぶ新しい資本の概念として世界的に注目を集めつつある。特に欧米の先進諸国においてソーシャル・キャピタルの測定や形成のプロジェクトが進められるようになっている。しかしながら、ソーシャル・キャピタルの日本語訳は、「社会関係資本」、「人間関係資本」、「市民社会資本」といった用例はあるが、まだ定訳はない。また、ソーシャル・キャピタル概念そのものについても、依然様々な議論が行われている。そこで、ソーシャル・キャピタルを取り上げて、その考え方を簡単に紹介する。

〇ソーシャル・キャピタルの考え方

ソーシャル・キャピタルの代表的な定義は、ソーシャル・キャピタルの研究に大きな影響を与えたパットナムによるものである。かれは、ソーシャル・キャピタルを「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることができる、『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織」と定義している。信頼や規範、ネットワークといった今まで見えにくかった社会的要因を客観的にとらえ、「資本」として位置づけている。

また、ソーシャル・キャピタルの役割を検討するために、いくつかの分類が提案されている。その最も基本的な分類が、内部結束型、橋渡し型、階統的結合型というものである。内部結束型は同質的な集団のネットワーク、橋渡し型は多様な集団を結びつけるネットワーク、階統的結合型は地位や権力などが異なる人々からなるネットワークを言う。

ソーシャル・キャピタルの意義については、パット

ナムによって、子どもの教育成果の向上、近隣の治安の向上、経済発展、健康の向上など経済面、社会面に好ましい効果をもたらすと指摘されている。また、平成14年度の内閣府の調査によれば、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域ほど、失業率や犯罪率は低く、出生率は高く、また平均寿命が長いといった結果が示唆されている。その一方で、ソーシャル・キャピタルは、内部的指向性が強まれば、「排他性」につながるマイナス面も有すると指摘されている。このマイナス面を乗り越えるために、水平的でオープンなネットワークである「橋渡し型ソーシャル・キャピタル」の構築が重要であると考えられている。

ソーシャル・キャピタルの形成については、市民・事業者が自発的に築き上げる社会関係の中に存在すると考えられている。行政の役割は、形成のきっかけづくりのための環境整備を通じて、円滑な形成を促進することであると指摘されている。

〇これからの神戸づくり

震災復興において、ソーシャル・キャピタルが大きな役割を果たしてきたと指摘されている。震災時に、地域での助け合いの経験から、人と人とのつながりの重要性や日頃からの人間関係が不可欠であることを改めて実感した。また、震災から8年が経過した本年度に実施された「神戸市民1万人アンケート」の結果を見ると、「震災によって隣近所などの他人との結びつきを大切に思うようになった」を挙げる人の割合が、55.6%となっている。全国では約4割であることから、地域のつながりが大切であるという神戸市民の意識が高いと言える。

各面での具体的なつながりとしては、「小地域見守りネットワーク」、「神戸コミュニティ・クレジット」、「まちづくり協議会」「防災福祉コミュニティ」等の事例がある。

このような市民意識や取り組みを踏まえて、「復興の総括・検証」の中間報告では、市民参画・協働のまちづくりによって「これからの神戸づくり」を進めるために、水平的で開放性の高いネットワークとしての「ソーシャル・キャピタルの醸成」を図ることが重要であると提案されている。

（企画調整局総合計画課）

散歩天国イタリア その2

引き続き、イタリアの散歩習慣を紹介します。前回のナポリから半島を北上し、北東部のまちヴィチエンツァが今回の舞台です。

◆ヴィチエンツァとパッラーディオ

ヴィチエンツァは、ヴェネツィアの西方 60 kmにある人口 11 万人の都市である。ヨーロッパでも有数の「金」の集散地で、イタリアから輸出される金製品の 90%はここで加工されている。ミラノ、トリノといった大都市に次いでイタリア第3位の輸出高を誇っており、「小さいけれどスーペルに元気なまち」の代表格である。

イタリア半島の付け根を東西に走る幹線道路として古代ローマ人が紀元前2世紀につくった「ポストゥーミア街道」、その沿道に発展したま



パッラーディオが手掛けたバジリカ手前にはシニョーリ広場が広がる

ちを起源とするヴィチエンツァは、12 世紀中頃に都市国家となるがその後は近隣のパドヴァ、ヴェローナの支配を受け、15 世紀初頭からはヴェネツィア共和国の属領となった。イタリアが統一された 1861 年にはオーストリア領であり、5 年後に併合されている。

ヴィチエンツァは、ルネッサンス後期の大建築家「アンドレーア・パッラーディオのまち」としても知られている。パッラーディオは、このまちの主要なモニュメントのほとんどを手掛けており、まちの目抜き通りも彼の名前を冠している。この通りが、ヴィチエンツァの散歩習慣の舞台である。

◆アンドレーア・パッラーディオ大通り

ポストゥーミア街道を起源とするこの通りは、幅員約 10m、延長約 800m、路面は石畳で舗装されている。美しく清潔感のある通りはいかにも北イタリアの小都市といった風情があり、ゴミゴミしたナポリと同じ国とは思えない。通りに面した建物は最高でも5階建てで、壁面を揃えて立ち並んでいる。すべて切妻・平入りの勾配屋根である。一階には専門店が入っており、ブティックや貴金属店、文具店など上品で趣味の良い店が多い。店先がポルティコになっている建物もある。商店街だが、店舗やホテル等の営業目的と住民以外の車両通行は禁止されており、基本的には歩行者専用である。

ここヴィチエンツァでも散歩習慣は土曜日の夕方に

行われ、黄昏時のパッラーディオ大通りは人であふれる。通りが短いこともあり、市民が往復している様子がよくわかる。人出は、ナポリのローマ通りより少しおとなしい感じ。まちそのものと同じで、全体的に収まりのよい印象だ。ただ、同じ通りを行ったり来たりしながら友人や家族と散歩をする。買い物目的ではないが、ショーウィンドーはのぞき込む。途中で知り合いと出会えば立ち止まっておしゃべりを始める。といった習慣そのものは、ナポリで見たものと同質である。



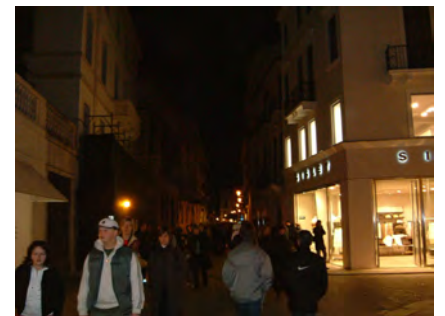
A・パッラーディオ大通り 右手は歩行者専用の標識

◆ヴァスカ

ヴィチエンツァでは、この習慣を「ヴァスカ」と呼んでいる。「ヴァスカ」はイタリア語で「プール」という意味で、同じ通りを往復しながら何度も歩くこの習慣を、競泳の「ターン」になぞらえているとのこと。通りを歩く人は夕方4時頃からだんだんと増え始め、7時過ぎにピークを迎える。店舗が閉まる7時半以降も人波は続く。

3月中旬の日が暮れるとまだ肌寒いなか、パッラーディオ大通りを歩く大勢の市民と一緒にヴァスカを楽しんだ。まちがコンパクトなので、ヴァスカに参加す

ればヴィチエンツァの住民全員に会えるような気がする。実際、昨夜夕食をとったレストランのウェイトレスもヴァスカを楽しんでいたし、そ



の彼女もすれ違う友人とおしゃべりを始めるなど世間が狭い。人出は8時半頃いったん落ち着きをみせたが、10 時過ぎにまた勢いを取り戻した。食後の散歩が始まったようだ。これくらい遅い時間になると、歩いているのは若者が中心である。

翌日曜日は、大通りに面した店舗の定休日である。土曜日より人出は少ないが、思ったより大勢の人がヴァスカを楽しんでいた。ナポリのローマ通りと異なり、ヴィチエンツァでは日曜日にも歩く人がたくさんいるようだ。市民にとって欠くことのできない散歩習慣、そのローカリズムの微妙な違いを感じながらイタリアを後にした。 上村 竜生（都市計画総局地域支援室）

これからも、お手伝い

By 浅野 智子 (まち・コミュニケーション・WS隊)

わたしは、阪神・淡路大震災当時、大学で環境デザイン学を専攻し、住民主体のまちづくりのあり方に関する研究活動を行っていた。震災後は、西須磨地区で住民のまちづくり活動の支援を行ってきた。今回のCPUへの応募は、自分が積み重ねた知見を活かして住民のまちづくりを支援しながら、被災地の復興の現状について見聞を深めたかったからである。また採用を申請した「まち・コミュニケーション」は、御蔵通5・6・7丁目地区のまちづくり活動を震災直後から支援してきた非営利組織で、新しい公共のあり方を模索するよい機会と考えた。

派遣期間中のわたしの業務は、派遣当初は、当団体の事務処理や、地元組織の会議運営や修学旅行生の受け入れなどの支援で、その後、地域の産業や公共部門の活性化に向けた調査研究に参画した。また、その具体的な取り組みとして、当地区に多く残る空き地の活用の検討に向けて、小学生への遊びの実態に関するアンケート調査を企画した。さらに当団体主催の空き地活用をテーマとしたイベントで、空き地での現代美術の野外展の運営に関わった。

事業終了に当たっての感想は、まず震災復興区画整理事業も最終章を迎えた現在、当地区の復興はまだまだ途上にあるということである。まち・コミュニケーションには、当地区の住民主体のまちづくりへの、より戦略的かつ新たな支援が求められていることを実感する。最後に、筆者を暖かく迎えてくれた当地区の関係者に感謝し、今後の活動を祈念するとともに、今後も微力ながらも何らかの形で応援していきたいと考えている。

まちづくり会館からのお知らせ

こうべまちづくり会館 1階オープンギャラリーの展示

11月21日(金) ～12月9日(火)	第2回メロディブリッジ コンテスト優秀作品	建設局道路部計画課
12月11日(木)～27日(土)	景観・ポイント賞受賞作品展	都市計画総局地域支援室

こうべまちづくり会館 地階ギャラリーの予定

期 間	内 容 ・ テ ー マ	主 催 者
12月4日(木)～9日(火)	花を水彩で描く	水彩華クラブ
12月11日(木)～16日(火)	「キルト♡マインド」パッチワーク作品展	宮本 純子
12月18日(木)～23日(火)	喜び・怒り・哀しみ・楽しみ — ^{みすが} 御菅カルタ原画展—	御蔵通5・6・7丁目自治会
1月8日(木)～13日(火)	神戸大学写真部展	神戸大学写真部

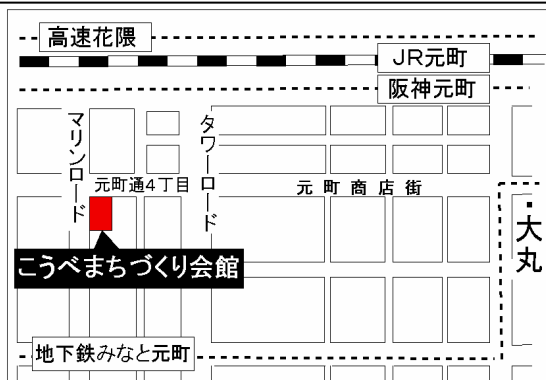
投稿のお願い

まちづくりセンターでは、「あーばんとーく」が読者の皆様のお役に少しでもたてるように、まちづくり協議会が行う地域でのイベントなどの行事案内やまちづくり協議会の活動の記事を募集しています。

誌面の許す限り最大限取り上げていきたいと考えています。

ご希望に応じて、取材にお伺いすることもできます。

まちづくりセンター（電話361-4523）までご一報ください。



最寄駅
 地下鉄海岸線みなと元町駅西口から1分
 高速花隈駅東口から3分
 高速西元町駅東口から5分
 JR・阪神元町駅西口から8分